原 著

X線走査キモグラフィーによる 生体骨鉱物質濃度測定に関する研究 第Ⅲ報糖尿病患者に観られる骨変化

昭和40年11月18日受付

信州大学医学部戸塚内科教室 (主任: 戸塚忠政教授)

三 原 宏 俊

Studies of In-vivo Measurements of Bone Mineral Concentration by X-Ray Scanning Kymography Part 3. Bone Changes in the Diabetics

Hirotosi Mihara

Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine,

Shinshu University

(Director: Prof. T. Tozuka)

緒 賞

種々なる疾患の際、骨に変化のあらわれる事が知ら れており、その際に観られる骨の変化は骨の粗鬆化、 軟化, 硬化, 又はその何れかが同時に存在する形であ る①が、前二者は何れも Bone mass の減少をあらわ し、実際には、Bone mass の減少が最も遭遇する骨 変化である。Nordin^{②③④}は Bone mass の減少を 来たす疾患として, ① Malabsorption syndrome 2 Hyperthyroidism, 3 Cushing's syndrme and Steroid therapy. (4) Acromegaly, (5) Hyperparathyroidism を挙げ、更に疑問符を附しつつ、⑥ Diabetes mellitus を加えている。著者は糖尿病患者40 名に就き第Ⅰ報に述べた原理、方法に基ずき骨鉱物質 含有率測定を試み、第 II 報に述べた正常者骨鉱物質含 有率の経年的変化と糖尿病患者のそれを比較検討し, 又,被検患者の骨鉱物質含有率と臨床症状との関連性 を観察した。

象 恢

糖尿病患者40名を測定の対象とし、第 I 報に述べた原理に基ずき、X線走査キモグラフィーにより原則として右大腿骨を測定部位として遠位骨端部及び骨幹部の骨鉱物質含有率測定を試みた。対象者の性別内訳は、男性21名、女性19名であり、その年令の範囲は男性で34才から65才、女性で26才から73才に亘つた。そ

の内訳は、20才代 1,30才代 4,40才代 10,50才代 16,60才代 8,70才代 1名であつた。これらの患者が糖尿病と診断されてから著者の検査を受けるに至るまでの、明らかな罹病期間は、0.5年から17年に及び、その内訳は、5年以下が29名、5年以上、10年以下が10名、10年以上が1名であつた。血糖値の測定は Hoffman 法により、尿糖の判定は試験紙法(テステープ)によつた。又、血清コレステロール値の測定は、Zak-Henly 法によつた。

結 果

患者の年令構成、性別及び得られた骨幹皮質状部、 遠位骨端海綿状部の骨鉱物質含有率を表 I に示す。

更に各症例に就いて、早朝空腹時血糖値、尿糖、各種食餌負荷後の最高血糖値及び尿糖、血清総コレステロール値、血圧上昇の有無、限底所見、本検査実施時の治療の内容を一括して表』に示す。尚、総コレステロール値に就いては、採血時及びその時の状態を考慮し、短時日内に再検してあるものに就いては、変動巾の少ない値の中から選んだ。又、治療の内容は、食餌療法(D: Dietary Management)、経口糖尿病剤使用(O: Oral Antidiabetics)、インシュリン療法(I: Insulin Therapy)の何れかの単独又は、それらの併用療法実施を表わす。

更に,骨鉱物質含有率は第Ⅱ報に於いて述べた如き 経年的変化を示すので,被検患者の年令層での正常者 に対する変化の程度を以つてあらわす事が妥当と考え、該当年令層の正常者の骨鉱物質含有率を1.0とした時の糖尿病患者のそれを算出し、この値を骨鉱物質含有率補正値(Revised Value of Ratio of Bone Mineral Content)とし、この値を全症例に就き表置に示す。但し、この補正値は、後述せる理由により骨幹皮質状部の値に就いてのみである。

表Ⅱに示した、骨幹皮質状部での骨鉱物質含有率補 正値と表Ⅱに示したほぼ全症例に亘つて共通して検査 を実施した数値の内、罹病期間、早朝空腹時及び負荷 試験食摂取後の最高血糖値及び血消総コレステロール 値との関連性を図1より図3に直り示す。

叉, これら40例の糖尿病患者の骨幹部骨鉱物質含有 率が骸当する年令群の正常の値に対して, どの様な分 布を示すかを図4に示す。

先ず表 I に明らかな如く,これら糖尿病患者に於ける骨幹皮質状部と骨端海綿状部の骨鉱物質含有率は,両者間に平行性が乏しく,全体としてむしろ遠位骨端部の値が相当する年令層の正常者よりも,高値を示す傾向すらあり,又,個体による変動程度が大きく,第 II 報に述べた測定上の信頼度の問題と相俟つて,指標としては,骨幹部の骨鉱物質含有率が,より適当と考えられ, 精臨床症状との比較検討にあたつては、この値を用いた。

表 II 及び図 4 に示す如く、糖尿病患者の各年代に於 ける骨鉱物質含有率は全体的に低下している。ただ、 その低下の程度は第1報で述べたその年会園での正常 者の Range をこえない程度のものもあるが、概して 60才以下の糖尿病患者では骨鉱物質含有率の低下を示 す例が多い。正常者に対するその低下の程度をみる と, 該当年令正常者の50%代が3名, 60%代 5名, 70%代 6名, 80%代 7名で, 90%以下が21名と全 体の約50%を占める。又、骨鉱物質含有率は表Ⅱ及び 図1,2,3にみる如く, 罹病期間との間には殆んど関 連性がみられない。血糖値との関連に就いては、早期 空腹時血糖値とも、又、坂口食、509プドウ糖負荷及 び普通食摂取後の最高血糖値とも殆んど一定の関係を 見出す事ができない。しかし、血清総コレステロール 値との間には、程度の弱い負の相関がうかがわれる。 即ち、総コレステロール値の高い症例では概して、骨 鉱物質含有率が低下しており、逆に総コレステロール 値の上昇が著明でない症例では、骨鉱物質含有率の低 下が著しくない症例が多い。又、血圧値との関連も殆 んどみられず, 眼底所見上糖尿病性変化を示す症例が 対象群中、僅少であるため、これのみでは眼底所見と の関連性を論ずる事は不可能である。

Table I Material examined and the Ratio of Bone Mineral Content

		1		D // C D 3/1			
		İ	Sex	Ratio of Bone Mineral			
No.	Case	Age		Content			
1101	00			Cortical	Cancellous		
1	н. м.	26	₽	0.81	0.50		
2	м. А.	30	ρ	0.671	0.345		
3	н. м.	33	우	0.89	0.78		
4	S. H.	34	ô	0.56	0.48		
5	S.M.	34	유	0.834	0.664		
6	Y. Y.	40	ô	0.705	0.427		
. 7	M. T.	41	우	0.755	0.65		
8	н. м.	43	ô	0.589	0.545		
9	K. A.	44	ô	0.562	0.473		
10	T. N.	44	ô	0.90	0.629		
11	т. к.	44	ô	0.998	0. 529		
12	м. н.	47	ô	0.70	0.60		
13	к. і.	47	· P	0, 667	0. 502		
14	S. I.	48	유	0.71	0. 633		
15	H. S.	49	ð	0.90	0.55		
16	U. I.	50	ð	1.24	0.792		
17	S. N.	51	Ş	0.565	0.55		
18	н. г.	52	ð	0.666	0.478		
19	T. N.	53	ð	0.90	0, 686		
20	н. к.	53	8	0.694	0.57		
21	5. M.	53	유	0.706	0.513		
22	н. м.	53	우	0.46	0.719		
23	M. S.	54	우	0.72	0.562		
24	S. H.	55	8	0, 873	0.545		
25	к. к.	55	ę.	1.018	0.62		
26	т. н.	56	6	0.588	0.509		
27	M. I.	57	8	0.597	0.578		
28	S. F.	58	우	0.624	0.50		
29	S. N.	59	8	0.975	0.552		
30	F. S.	59	ô	0.85	0.577		
31	s. ĸ.	59	ρ	0.955	0.555		
32	Y. M.	60	ે જે	0.98	0.988		
33	N. S.	60	ô	0. 52	0.434		
34	S. F.	61	Q.	0.52	0.465		
35	к. м.	61	<u>Р</u>	0.89	0.64		
36	т. ү.	62	8	1.035	0.505		
37	Y. K.	65	ô	0.82	0. 446		
38	s. I.	65	· ρ	0.612	0.45		
39	м. А.	68	ę	0 887	0.589		
40	S. M.	73	우	0.67	0.666		
		- 1	- [,	2.550		

Table II The Ratio of Bone Mineral Content (Cortical Portion) and Clinical Findings

					or thom, and or	
No. of	R.B.M.C.	Years since the case was	Fasting Blood	Maximum Blood	Total Cholesterol	
Cases	(Cortical)	diagnosed as Diabetes	Sugar Level	Sugar Level	Level in Seru m	Hypertension
		Mellitus	(mg/dl)	(mg/dl)	(mg/dl)	
1	0.81	3.5	205 (++)*	G. 295 (+++)*	255	(-)
2	0.671	6	180 (+)	G. 200 (+)	230	(-)
3	0.89	6	100 (-)	S. 240 (++)	207	()
4	0.56	6	110 (-)	170 (+++)	200	(-)
5	0.834	2	130 ()	G. 304 (+++)	345	(-)
6	0.705	1	120 ()	S. 140 (-)	178	(-)
7	0.755	4	112 (-)	G. 140 ()	145	172 ~ 106
8	0.589	3.5	175 (-)	S. 370 (++)	271	182 ~ 102
9	0.562	5	100 (-)	G. 260 (+++)	162	(-)
10	0.90	3	110 ()	S. 152 (-)	195	()
11	0.988	3. 5	110 (-)	S. 185 (+)	155	144 ~ 80
12	0.70	6	121 (-)	S. 220 (+++)	182	()
13	0.667	- 5	115 (+)	S 265 (+++)	245	150 ~ 100
14	0.71	1	120 (-)	G. 250 (+)	185	(-)
. 1.5	0.90	2	150 (+)	G. 280 (++)	269	(-)
16	1.24	0.5	160 (-)	G. 330 (+++)	129	()
17	0.565	6	120 (-)	230 (+++)	300	156 ~ 84
18	0.666	3	140 (-)	265 (++)	210	135 ~ 100
19	0.90	1.5	117 (-)	G. 250 (+)	129	160 ~ 110
20	0.694	2	90 ()	245 (++)	200	(-)
21	0.706	8	198 (-)	335 (++)	252	(-)
22	0.46	7	97 (-)	240 (+)	248	(-)
23	0.72	1	148 (+)	290 (+++)	256	(-)
24	0.873	2	175 (++)	280 (++)	195	(-)
25	1.018	2	145 (-)	G. 285 (++)		172 ~ 98
26	0.588	2.5	80 (-)	S. 180 (++)	205	130 ~ 90
27	0.597	8	137 (+)	G. 310 (++)		(-)
28	0.624	1	110 (-)	150 ()	300	170 ~ 90
29	0.975	2.5	98 (—)	S. 202 (+)	247	(-)
30 31	0.85 0.955	1.5	98 ()	148 (-)		148 ~ 100
	0.98	2. 5 7	110 (-)	200 (+)	225	160 ~ 85
32 33	0.52	3	100 (-)	G. 300 (+++)	172	(-)
34	0.52	6.5	105 (-)	170 (-)	276	150 ~ 96
35	0.89	1.5	119 (-)	G. 200 (-)	211	(-)
36	1,035	2	100 (+) 120 (-)	G. 238 (+++)		(-)
37	0.82	1	130 (+)	S. 270 (+++)	046	()
38	0.612	1	113 (-)	G. 265 (+++)	246	(-)
39	0.887	1	105 (-)	G. 174 (-)	210	()
40	0.67	8	120 (-)	250 (+)	215	$152 \sim 104$
70	5.5.		120 (-)	S. 180 (+)	285	(-)

Abbreviations.

¹⁾ G. or S. before the figures of Maximum Blood Sugar Level indicates 50g.-glucose Tolerance Test and Sakaguchi's Test Diet respectively.

^{*} show the grade of glucosuria.

³⁾ In the column of Management the letter D., O. and I. stand for;

D: Diet Therapy

O: Oral Antidiabetics I: Insulin Therapy

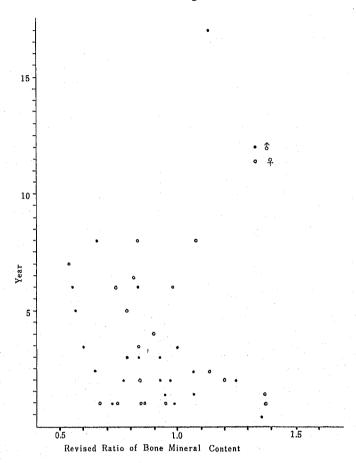
in Diabetics

Table III Revised Value of the Ratio of Bone Mineral Content of Diabetics in

	Management	Bone Mineral Content of Diabetics in each Age.			
Findings of Fundus oculi		No. of	R. B. M. C.* (Cortical)	Normal Value of the Corresponding	Revised Value (Regarding the corrspon- ding Normal
Normal	D+I	Oubob	of each Case	Age Group	Value as 1.0)
Normal Normal	D+I+0			1	1
Normal	D.	1	0.81	0, 975	0, 83
Cataract	O. D+O+I	2	0.671	0.904	0.74
Normal	0.	3	0.89	0.904	0.99
Normal	0.	4	0.56	0.994	0.56
Normal	D+0	5	0.834	0.994	0.84
Normal	D+0	6	0.705	0.98	0.72
Normal	D.	7	0.755	0.84	0.90
Normal	0.	8	0.589	0.98	0.60
Normal	D+0	9	0,562	0.98	0.57
Normal	D+0	10	0.90	0.98	0.92
Normal	D + O		0.998	0.98	
Normal	D+O	11			1.0
Normal	D+I	12	0.70	0.847	0.83
Normal	D+O	13	0.667	0.847	0.79
Normal	D+O	14	0.71	0.847	0.84
K. W. IIa	D+0	15	0.90	0.982	0.92
Normal	D+0	16	1.24	0.904	1.37
Haemorrhagia retinae bilat.	D+0	17	0.565	0.847	0.67
Normal	D+I	18	0.666	0.847	0.79
Normal	D+0 D+0	19	0.90	0.847	1.06
Normal	D+0	20	0.694	0,904	0.77
Normal	D.	21	0.766	0.847	0.83
Normal	D+0	22	0.46	0.847	0.54
Normal	D.	23	0.72	0.847	0.85
Normal	D+0	24	0.873	0.904	0.97
Normal	D+0	25	1.018	0.847	1.20
Normal	D+0				
Haemorrhagia retinae sin.	D+I	26	0.588	0.904	0.65
Normal	D+0	27	0.597	0.904	0.66
Retinopathia hypertonica	D+0	28	0.624	0.847	0.74
Normal	0.	29	0.975	0.904	1.08
Normal	0.	30	0.85	0.904	0.94
Normal	D+0	31	0.955	0.847	1.13
Normal	0.	. 32	0.98	0.829	1.18
Normal	0.	33	0.52	0.829	0.63
Normal	0.	34	0.52	0.643	0.81
		35	0.89	0.643	1.38
		36	1.035	0.829	1, 25
		37	0.82	0.829	0.99
		38	0.612	0.643	0.95
		39	0.887	0.643	1.38
		40	0.67	0.615	1.09
		40	0.07	0.015	1.09

^{*} R. B. M. C.: Ratio of Bone Mineral Content

Fig. 1 Relation between Revised Ratio of Bone Mineral Content and Years since the Case was diagnosed as Diabetes Mellitus

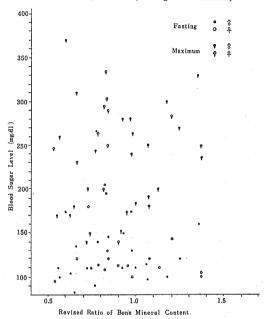


総括並びに考按

緒言で述べた如く Nordin は骨粗鬆化を来たす疾患として代表的な6疾患を挙げ、糖尿病をその中に加えてはいるが疑問符を附している。Bartter 及びBauer®は骨粗鬆症を病因的に分類し、糖尿病に於ける骨粗鬆化は骨 Matrix の欠乏によるものであり、その内でも Absolute or relative inadequency of nitrogenous components によるものと分類し、糖尿病に於いては骨の Matrix を形成するのに必須である物質が熱源として動員されるために Matrix の欠乏が生じ、その結果として Bone mass の減少があらわれると説明している。一方、糖尿病に観られる諸病態が全体としては早期老化の現象であるとの考え方から Hernberg®は糖尿病患者に於いて骨粗鬆化は、しばしばみられる所見であると報告したが、Jakson®はこれを否定する報告をしている。骨鉱物質量がコレはこれを否定する報告をしている。骨鉱物質量がコレ

ステロールを含めた脂質代謝と、どの様な場でどの様 に関連し合つているかに就いては一定の見解は得られ ていない。糖尿病に限らず血清コレステロールは粘液 水腫、黄色腫症、ネフローゼ症候群、アルコール中 毒、中毒性甲状腺機能亢進症、黄疸、妊娠、麻酔等の 疾病乃至病的状態で増加するが経年的な変化も指摘さ れている[®]。糖尿病は Panendocrine disorder Panmetabolic disorder と考えられる程、影響する 因子の多い疾患であり、糖質代謝障碍を中心として同 時に蛋白質及び脂質代謝障碍が存在する事も臨床及び 実験的に明らかにされている。糖尿病の際、しばしば コレステロールの増加が観られる事は、かなり以前よ り知られている事実であるが、この代謝機序に就いて も未だ全べての点で一致した見解が得られている訳で はなく、増加するとする成績®不変とするもの®、減 少するとするもの印がある。糖尿病に於ける脂質代謝 異常を Dole¹²⁰は、① 脂酸合成の障害、② 脂肪貯蔵

Fig. 2 Relation between Revised Ratio of Bone Mineral Content and Blood Sugar Level (Fasting and Maximum)



臓器よりの脂質遊出の亢進、③ 種々の臓器への脂質 異常沈着,の三つに要約した。糖尿病状態に於いて最 も著しい変動を示す血滑脂質分画は Triglyceride で あり、コレステロールの上昇は少なく、燐脂質の変動 はその中間に位いする。しかし、代謝異常の高度の場 合には何れの脂質分画も上昇し、コレステロールもそ の例外ではない。又, 逆に治療により代謝異常が正常 化される過程に於いてもコレステロールや燐脂質の低 下は Triglyceride の低下よりも速やかに起こる。 Adlersberg 及び Eisler ®は血糖値の高さと、動脉 硬化の存否により糖尿病患者を4群に分け、更に血中 脂質分画との関係を追求し、糖尿病に於ける血中脂質 の上昇は糖代謝異常に随伴する因子と動脉硬化の存在 に関する因子が共存し, この両因子の内前者の影響は コントロールにより除かれ血管障害のないものでも、 血中脂質はよく正常化するが、動脉硬化のある症例で も血中脂質の増加を減ぜしめると報告した。小坂等も 血管障害の有無と治療による血中総脂質及びコレステ ロールの改善との関係に就き、糖尿病患者に認められ る血中脂質の上昇には、糖尿病それ自体の脂質代謝異常と動脉硬化に由来するものが共存する可能性があり、前者は糖尿病の治療により改善されるが、後者は治療後に於いても尚、存在するものであろう事を報告している。

著者の、骨鉱物質含有率測定の対象となつた糖尿病思者40名は大部分が、測定の時期においては、表 II に示す如き内容の管理により、大体コントロールされている症例であり、それらの症例に於いて全体として血糖値、自覚症、罹病期間とよりは、血中総コレステロール値が骨鉱物質含有率と程度は弱いが、負の相関で示す傾向にある事は、上に述べた糖尿病患者に於ける血中脂質の動態に関する諸飯の研究と併せ考えて興味ある所見である。又、血糖企血中コレステロールのあが、砂っずしる密接な平行性がない事®は知のられた事実であるが、殊に進行した症例ではその傾向が大きい。従つて骨鉱物質含有率が空腹時及び最高血糖値とは殆んど関連を示さず、むしる血清コレステロール値との間に関連を示さず、むしる血清コレステロール値との間に関連を示す事は、各種の治療により血糖

Fig. 3 Relation between Revised Ratio of Bone Mineral Content and Serum Level of Total Cholesterol

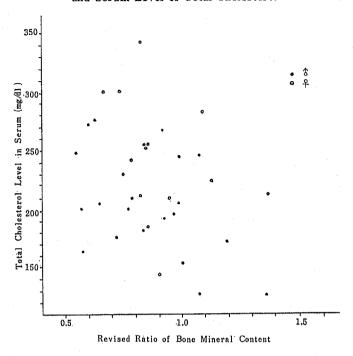
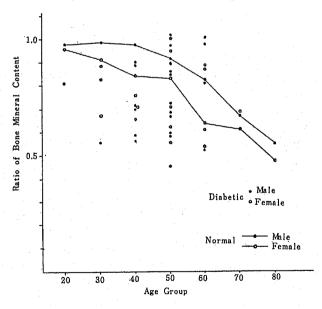


Fig. 4 Distribution of Ratio of Bone Mineral Content of Diabetic Material compared with Normal Age Change in Age Groups



値は一応のコントロールに達していても尚, コレステロール値の上昇がある様な症例, 従つて病態の進行した症例では, 骨鉱物質量の低下があらわれるものと考

えられる。糖尿病に於ける骨鉱物質含有率の低下の原因は糖尿病そのものが、Panendocrine disorder、Panmetabolic disorder と目される疾患である以上

その要因は単一なものでは決してなく、血消総コレステロール値との関連は総コレステロール値の高い事、 従つて是正されない脂質代謝の異常が骨鉱物質含有率 の低下と最も密接に関連しているのか、更には、より 根本的な次元に於いて糖尿病の病態に関与する額々の ホルモンが、骨鉱物質含有量の保持と関連し合つて進 行せる糖尿病に於いて、その一つの合併病変として骨 鉱物質量の減少を結果するものなのかは今後尚一層の 追求を必要とする。

結 囂

糖尿病患者40名に就きX線走査キモグラフィーを使用して骨鉱物質含有率測定を試みた。対象とせる患者は大部分がコントロールされている患者である。 その結果,

- 1. 糖尿病患者に於いては、多くの年代に於いて骨 鉱物の減少を認める。
- 2. これら患者の臨床症状の内,全患者に共通して 実施された諸検査結果と骨鉱物質含有率を比較検討す ると,
 - a. 罹病期間とは殆んど関連性がない。
 - b. 早朝空腹時血糖値及び各種食餌負荷後の最高 血糖値とも関連性は乏しい。
 - c. 血滑総コレステロール値とは程度の弱い負の 相関が認められる。

事を認めた。

稿を終るにあたり、御指導御校関をいただいた恩 師、戸塚忠政教授に深抵なる閻意を表すると共に、本 研究に終始御助言、御教示いただいた草間昌三助教 授、松岡正俊前助教授、溝上長男博士に感謝の意を表 します。

文 献

(Dovle., F. H.: Ulnar bone mineral concentration in metabolic bone disease. Brit. J. Radiol. 14:11, 1661 ②Nordin., B. E. C.: Primary and secondary hyperparathyroidism. Advanc, Intern. Med., 9:81-105, 1958 (3) Nordin., B. E. C.: Osteoporosis and calcium deficiency. Proc. Nutr. Soc., 19, 1960 @Nordin., B. E. C., Fraser. R.: Vitamin D resistent osteomalacia associated with neurofibromatosis. Proc. roy. Soc. Med., 46:302-304, (6) Bartter., F. C., Bauer., W. in Cecil. R. L. & Loeb, R. F. et al., Eds. Osteoporosis. Textbook of Medicine, Saunders & Co. Lon-®Hernberg., C. A.:Sklettveränderungen bei Diabetes mellitus der Erwachsenen, Acta med. scand, 143: 1-14, 1952 7) Jackson.. W. R. II.: Osteoporosis of unknown cause in younger people; idiopathic Osteoprosis, J. Bone Jt. Surg., 40-B.: 420 - 441, 1958 P., Root., H. F., White, P., & Marble, A.: Treatment of Diabetes Mellitus, Ed. 10, Philadelphia, Lea & Febiger, 1959 @Hotta., S., & Chaikoff., I. L.: J. Biol. Chem., 198: 895, 1952 @Brady., R. O., & Gurins., S.: J. Biol. Chem., 187: 589, 1950 @Wang,, R. K. L., & van Bruggen, J. T.: J. Biol. Chem., 235: 26, 1960 @Dole., V. P.: Vall, New York Acad, Med., 34: (1) Adlersberg., D., & Eisler., L. E.: J. A. M. A., 170: 1261, 1959 (A)小坂樹徳 · 村地 悌二・髙橋善弥太:糖尿病, 5:40, 1962